

2014年3月23日 受難節第三主日礼拝

説教 私たちの場所

ヨハネの福音書 14章 1-6節

【さすらいの季節】

青年時代は、自分の居場所がどこにもないように感じ、自分の場所を求めてさすらいのもの。切ないほどに。若いころはそういう感じは自分だけだと思っていたが、そうではない。自分の親も、自分の子どもも、自分と同じようにさすらいの季節の中にいる。いったい、私たちの場所は、どこにあるのか。主イエスは最後の晩餐で、「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります」(2)とおっしゃった。私たちの場所は天にはある。では、地上にはないのでしょうか。

【バベットの晩餐会】

映画「バベットの晩餐会」。諍(いさか)いが絶えない小さな教会で、元シェフのバベットは持てるものを注ぎ出して、フルコースの料理をふるまう。それは、教会の人々がうっとりとするほどの味。味わううちに、人々の心は和み、失われていた愛の交わりが回復されていく。この晩餐会に招かれたお客は12人。最後の晩餐をイメージする食卓での愛の交わり。そして、その交わりは天国とつながっている。そして、バベットの注ぎ出す愛によって天国の交わりが地上にもたらされたのでした。先週の礼拝では主イエスが、あわ

れみで胸を熱くしながら、私たちの足を洗ってくださいったところを読みました。バベットのしたことは、主イエスの愛を、もう一度思い出させること。村人たちの足を洗い、自分を注ぎだして、愛の交わりを回復させること。

「わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるため」(3)。天とはどこか。主イエスのおられるところ。そこには、愛の交わりがある。そこが私たちの場所。教会というキリストのからだ。そこで本気で覆い合うときに、ここが私たちの場所であることを知り、そのときがさすらいの季節の終わり。

【ビリーブ・イン・ミー】

「神を信じ、またわたしを信じなさい」(1)は、ビリーブ **イン** ミー。信じるということが、ただ頭だけのことではない。主イエスの中で信じる。主イエスの広げた腕の中に飛び込んでしまう、それが信じるということ。そこは、もうすでに天国。この世に生きていながら、すでに天国。なぜなら、主イエスがおられるところが天国なのだから。そして、気がつく主イエスのうでの中にあるのは、自分だけではない。そこには、私たちの大切な兄弟姉妹がみんないる。主イエスのうでの中で信じる私たちと仲間たち。主イエスはその私たちに抱きしめて離さない。

【道・真理・いのち】

「わたしが道であり、真理であり、いのち」

(6)。だれも神への道を発見した者はいなかった。なぜなら、道は主イエスご自身だから。そして、このお方は、探し出されることを待っていたのではなかった。ご自分から私たちのところにやって来られました。だから、私たちは主イエスに会うことができる。主イエスに会ったとき、私たちは道を発見している。主イエスに会ったとき、私たちは真理を手に行っている。そして、主イエスに会ったときに、私たちは、いのちに入れられている。

先週、ひとりの姉妹がお母さんに伝道するために、里帰りをした。地元の牧師を招いて、語り合い、聖書も開かれた。最後に牧師が祈ったとき、お母さんが「あら、今イエス様が居てくださったんですね」と。主イエスが来てくださったのがわかった。主イエスが触れてくださって「私はここにいるよ」とおっしゃったことが、お母さんにわかったのです。

【恵みとまこと】

救いの真理は神さまのあわれみの中で、主イエスのうでの中で実現している。ルターは「大胆に絶望せよ」と。なぜなら私たちが絶望する場所は、主イエスのうでの中だから。主イエスのうでの中で、大胆に生きる私たち。

羽仁もと子のモットーは「朝に起きて祈り、昼は疲れるまで働き、夜は祈って寝る」。なんたるシンプル！主イエスのうでの中で、私たちも大胆に、シンプルに生きているのです。